＜クリスマス・ドロップ作戦2015＞ 島からの眺めと心の贈り物

Operation Christmas Drop 2015: View from the islands, drops from the heart

January 19, 2016

Original text by Osakabe Yasuo
374th Airlift Wing Public Affairs

強風が吹き荒れ、雨がトタン屋根をたたきつける。嵐が過ぎ去ると、燃えるような夕焼けが現れ、やがて視界いっぱいに広がる夜空に無数の星が瞬きはじめた。南洋の小さな島に立つと、雲はまるで手に取れそうなほど低く感じられた。

これはウルシー環礁にある小さなファラロップ島から私が見た光景だ。この島については、それまで写真や話でしか知らなかった。この島も、米空軍機が「クリスマス・ドロップ作戦2015」で生活物資を投下した島の一つだ。

旅の初めは、まずヤップ島へ第459空輸中隊のC－12輸送機で向かい、そこから小型機を乗り継いでファラロップ島とファイス島へやって来た。

ウルシー環礁のファラロップ島に航空機が着陸態勢に入ると、視界に広がる紺碧の西太平洋は、明るいターコイズ色のサンゴ環礁で囲まれた海面へと変わっていった。まるで海に人の手で長細い道が造られているかのような光景だった。ウルシー環礁は、東京から南に2，092キロ、グアムから南西に628キロのカロリン諸島の最西端に連なる。

着陸態勢の間、2015年4月1日、台風メイサークがこの島に甚大な被害をもたらした光景が目に入ってきた。多くのココナッツの木の上部が、もぎ取られているか折れた状態になっていた。島中から多くの生徒たちが通った高校は廃墟と化し、屋根は飛ばされてなくなり、机や棚なども壊れ散らばっていた。ほとんどの家は様々な地域の国際支援団体から寄付された白や青色の防水シートで覆われたままになっていた。

過去8か月の間、復旧の努力は続けられていたものの、島が遠隔地にあることから作業はなかなか進んでいなかった。話をした離島高校の農業科学科教師スティーブン・マラ氏は、アメリカからの支援でもらったテントで、生徒たちは現在勉強していると話してくれた。幾つかのテントのうちの一つの床は、近くのビーチの白いサンゴ砂で造られていた。足裏に伝わる感触がとても気持ち良かった。「これは生徒のアイデアなんだ」とスティーブンは満面の笑みで話した。

「台風メイサークによって全てを失った。でも、そのことが我々に助け合いがいかに大切なことかを教えてくれた。時に島の生活ではそれを忘れがちだ」とマラ氏は語った。

この小さな島では、この自然災害によって多くの島民が今までの生活を断たれる被害を受けたが、私は望みを垣間見た。皆が、今こそ自分たちが住む場所を復旧、改善しようと立ち上がったのだった。

翌日、米空軍、航空自衛隊、オーストラリア空軍が「クリスマス・ドロップ作戦」を実施し、寄付で集められた生活必需物資の梱包を次々に島に投下した。しかし、私の旅はそこで終わらなかった。もう一機の飛行機に乗り込み、次の目的地「ファイス島」に向かった。ファイス島はカロリン諸島の東に位置す

ウルシー環礁・ファラロップ島上空に現れたミルキー・ウェイ

家で仕事に勤しむ島の女性たち
昨年の台風の被害を受け、防水シートで覆われたままの屋根

漁獲したまぐろを運ぶ漁師たち
得た魚はすべて酋長によって3つの村に均等に分けられる

る隆起珊瑚島だ。島にはリンを含むグアノ推積が豊富にあり、日本は78年前にこの島とリン鉱石採掘をしていた。

この島に第36空輸中隊のC-130ハーキュリーズ“サンタ11”が、最初の低コスト低高度パラシュート投下を行った。

島に着陸すると、ファイス島の酋長と村の人々に出迎えられた。洋服を着た人、昔ながらの島の衣装を身に着けた人が交ざり合っていた。何人かは近くの木の茂みから飛行機を見ていた。飛行機を降り立つと、湿気が体をまとわりつき、日差しが容赦なく肌に照りつけた。

ファイス島の酋長ルイス・マングタウ氏は、島に車はないと告げ、「ついておいで」と言って歩きだした。飛行場は島の中心にあり、周りはジャングルに囲まれていた。ジャングルの中をおよそ30分ほど歩いて行くと、浅黒い道は、サンゴ砂の白色の道に変わった。これらの道は、島の3つの村に続いていた。子供たちはココナッツの木の下にしゃがんでサンゴの石で遊んでいたり、女性たちは家で昼食の準備をしていた。10代もしくは20代くらいの青年たちは、材木、トタン屋根、ドラム缶の油などをビーチにつけられたボートから村へと勤勉に運び込んでいた。

「クリスマス・ドロップ作戦」でファイス島上空を飛ぶC－130に手を振る島の子供たち

私たちは酋長に付いて、その男性の住まい（男性のみ立ち入りが認められた住居）に行き、村民たちと腰を下ろし、島の生活について話を聞いた。マングタウ酋長は、ファイス島では、収穫された食べ物、漁師が漁をして得た魚、いろんな所から寄付された物資はすべて、島の3つの村に均等に分けられると説明した。

物資の投下地点に向かう時間となり、村の人々はジャングル中央の広場に集まり始めた。男性の一人が、航空機に投下地点を知らせる大きな青色の防水シートを広げた。村の人々は木々の下から空を見上げながらその時を待った。風に乗って聞こえてくる音は、ココナッツの木の間から風が通り抜ける音だけだった。ナイフを持った村人の一人が、まるで映画の「ランボー」に出てきた登場人物のように現れ「待っている間これを楽しんで」と、ココナッツを差し出した。島を探訪し疲れきっていた体をココナッツジュースで潤すと、エナジードリンクを飲んだように疲れが吹き飛んだ。

やがて、聞き慣れたターボプロップ・エンジン音が聞こえてきた。村の人々は、空を見回して音が聞こえてくる方向を探した。すると突然、C－130が最高速度で投下地点に並んだココナツの木々の上を通過した。

「これは、映画のワンシーンか？」と自問自答した。

これは尾翼に「YJ」と書かれた横田基地所属飛行機が、ファイス島上空を飛行通過するファースト・アプローチだった。島民たちは、ジャングルの茂みに隠れて物資が落下してくるのを待った。

米空軍のC－130Hパイロットは飛行機の高度を下げた。ランプが開かれ、ロードマスターたちは物資の投下準備をしながら島民たちに手を振った。もう一度飛行機が上空を通過した後、航空機は低コスト低高度パラシュートで最初の物資を投下した。パラシュートが開き、物資が速い速度で島に落ちて行った。村人たちは茂みから走り出た。総重量227キロの梱包を確認すると、7人の男性がジャングルからその男性の住居へと運んだ。酋長のマングタウ氏が箱を開け、中の物資を3つの村に均等に分けた。村人たちは、酋長が分配し終わるまでそれに触ることが許されず、じっとそれを見守った。彼のみが、誰が何を受け取るかを決める権限を持っていた。

投下された生活物資を分けるファイス島酋長ルイス・マングタウ氏

人道支援・災害救助訓練の一環として行われた「クリスマス・ドロップ作戦」において、今年は初の米空軍、オーストラリア空軍、航空自衛隊の3カ国合同で、56の島々に生活物資が投下された

子供たちやその家族が物資を受け取る様子をみる時間がなかったが、マングタウ氏は「米軍機がファイス島の上空を通過するのを、毎年12月、子供の頃から父親に投下地点に連れられて見ていた。子供ながらに、箱に何が入っているか興味津々だった。胸が躍る気持ちは今も変わらない」と語った。